

Eureka X

六年制通信 No.4 令和4年4月28日(木)号

ハイルマイヤーの質問

ハイルマイヤーは1970年代にアメリカ国防高等研究計画局の局長だった人です。若い研究員が新しいプロジェクトを提案すると、ハイルマイヤーは次の9項目の質問を投げかけるのだそうです。面白いよ。参考までに英文も書いておきます。

1. 何を達成しようとしているのか。専門用語を一切用いずに当該プロジェクトの目的を説明せよ。

What are you trying to do? Articulate your objectives using absolutely no jargon.

2. 今日どのような方法で実践されているのか、また現在の実践の限界は何か。

How is it done today and what are the limits of current practice?

3. 当該アプローチの何が新しいのか、どうしてそれが成功すると思うのか。

What's new in your approach and why do you think it will be successful?

4. 誰のためになるのか。 Who cares?

5. 成功した場合、どういった変化が期待できるのか。

If you're successful, what difference will it make?

6. リスクとリターンは何か。 What are the risks and the payoffs?

7. どのくらいコストがかかるか。 How much will it cost?

8. どれほどの期間が必要か。 How long will it take?

9. 成功に向けた進展を確認するための中間及び最終の評価方法は何か。

What are the midterm and final "exams" to check for success?

いかがですか。非常に説得力のある質問とは思いませんか。学校の教育活動、例えば生徒会で新しい企画を立てようとするときなどに使えそうですね。学校の場合、生徒が7番のコストのことを考える必要はないかもしれませんが「安全性がどれくらい担保されるのか」といった、ここにはない項目を加えないといけませんね。

さて、一つ一つ吟味して考えてほしいのですが、今回は1と4について考えてみたいと思います。どの質問も考えてみれば当たり前の項目だと思いますが、1の「専門用語を一切用いずに」というのが出色ですね。これ、実は簡単なようで非常に難しいことなのです。お互いに専門用語を了解しあっている場所で仕事をしていると、普段から専門用語、それどころか専門用語の略語などを多用しているはずですが、英文にある jargon は「特殊な人たちにだけ通じる専門語」という意味で使われていますが、本来は「わけのわからない、ちんぷんかんぷんな言葉」のことです。

学生の頃ある大きな学会があって、私は恩師のお手伝いをしていたのですが、哲学の偉い先生が若い発表者に対し「自分たちにしかわからない言葉で話してはいけません。難しい表現や言い回しができるということで自分を優秀だと勘違いする人が多いので気をつけなくてはなりません。本当に頭のいい人は難しいことを易しい言葉で表現できる人です」と仰いました。私は非常に感動して、それ以来この言葉を忘れたことはありません。しかし、難しいです。本当に難しい。恩師は「要するにどうということか。短く話さない」とよく言っておられました。難しいことを易しく表現するには物事の本質が理解できていないと無理です。そして理解できていれば、要するにこういうことだ、短く言えるというわけですね。今の君たちは専門語の飛び交う世界に生きているわけではないので「専門用語を用いずに…」はまだ早いけれど、物事の本質をつかみ要約して表現する練習ならできますね。ちなみに私はA4一枚に要約できないものは初めから読む気がしません。長ったらしい説明が嫌いです。これも若いころに先生から教わったことに影響を受けているのだと思いますけど…。

4は、何をするにしても最も大切な視点だと思います。この「誰」には自分が含まれていても含まれていなくても構いません。しかし「自分」だけが対象ならば、そんな企画はダメです。君たちも大人になって何らかの仕事をするでしょう。その時、自分の能力を公の福祉に資することに使えると自他ともに幸せですね。

聞くとところによると、この質問項目は文部科学省や経済産業省でも使われているらしいのですが（本当かどうか確かめてはいません）、ではあの評判の悪かった「ゆとり教育」を提言した人は「誰のためになるのか」に何と答えたのですかね。しかもその企画は通ったわけですから説得力のある答えだったはずです。ぜひ教えてほしいものです。

今週のおすすめ

・柚月裕子 『チョウセンアサガオの咲く夏』 （角川書店）

宝島社文庫から『5分で読める…』シリーズが出ていまして、その何冊かに柚月さんの短編が入っているのを知って読んだ覚えがあります。ですからこの短編集にある11の物語のうち半数以上は知っていました。ラストの「ヒーロー」には『検事の本懐』などでドラマにもなった佐方検事が脇役で登場します。ファンには嬉しいサブライズです。私も佐方さんの大ファンです。『検事の…』シリーズを読むと、トルストイの『アンナ・カレーニナ』のあの有名な冒頭「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸である」を思い出します。作家は様々な不幸の形を設定し、物語を紡ぎ出すのですね。確かに幸せな物語を読んでも、そこに人生を感じることはないですね。逆境のない人生には魅力を感じないですね、私は。

『検事の…』シリーズは面白いのはもちろんですが、勉強にもなります。ちなみに『あしたの君へ』と『盤上の向日葵』もおすすめです。『盤上の…』のドラマは千葉雄大さんの主演で放送されていましたね。私は観ましたよ。ちなみに竹中直人さんの演じた真剣師（賭け将棋を指す人）には実在したモデルがいるのですよ。

BGMは Kiroro の 長い間 でした…。